

十種石
江戸真砂廣本
三輯
九

1冊目
679
29



特
679
29

燕石十種第三輯九之卷

江戸真砂六十條廣本惣目録

卷之一

- 一 元祿金銀吹替之事
- 一 石川何某の女房奢之事
- 一 奈良屋何某の由来之事

卷之二

- 一 谷中感應寺流罪之事
- 一 村田半兵衛之事并英一蝶之事
- 一 永代橋を之事
- 一 深川炮祿流入定之事
- 一 本谷の何某横死之事
- 一 秋田津路家滅亡之事



卷之三

- 一江戸中大醫師時花の事
- 一一片心某の事
- 一笹屋某の事

- 一中村何某と云醫師求道の事
- 一河部家の金盗人の事
- 一伊勢屋何某出末分張の事

卷之四

- 一 中鴻屋何某之面者の事
- 一 江戸市屋何某の事
- 一 赤井氏奉行穢の事
- 一 高崎屋何某高内を替の事
- 一 西國橋歳世降の事

- 一 五十九嵐屋の賣出の事
- 一 丹波屋立身の事
- 一 丹羽遠江守殿求道の事
- 一 深川法善寺偽龍燈の事

卷之五

- 一 天一を語り種とさる事
- 一 甲坊至吉系遊ひの事
- 一 初賀屋何某鴻くは事
- 一 銀座奢り屋顯の事
- 一 本下と琳人小倉をる事
- 一 小松屋何某捕まの事
- 一 心川何某悪黨をる仕事
- 一 美濃屋何某利益よく身を打の事

一南都を何某の一生の事
上る巻以上

江戸真砂子六拾條

卷之六

下之巻
五拾七條
返加拾六條
合テ七拾三條
目錄

- 一 石橋を何某出奔の事
- 一 心下何某一書を致さる事
- 一 連舟の箱の事
- 一 町火消町刻の事
- 一 將軍吉宗公小金津猪狩の事
- 一 浅草深井志道軒の事
- 一 本不お梅姥の事

- 一 竹子の姥の事
 - 一 瓦姥の事
 - 一 高間騷動の事
 - 一 深川あててる殺の事
 - 一 権左清連助と同前には逆の事
 - 一 丹波を何某心中の事
 - 一 白子屋娘一ツ子花の事
 - 一 竹を逆芝居騷動の事
 - 一 筑前地敵討の事
- 卷之七
- 一 田浦万隆寺和尚の事
 - 一 波掛及門破の事
 - 一 日中左衛門と云ふ盗賊の事

- 一 藍屋何某を主と剛潔の事
 - 一 福田屋後好色の事
 - 一 後草西應道具之の事
 - 一 金杉伊豆屋と云酒屋の事
 - 一 朝比奈氏騒動の事
 - 一 棟梁の子を居て種族の事
 - 一 大和屋の小僧めけ多りの事
 - 一 不忌の池築地の事
 - 一 相列小田系大盗人の事
 - 一 追落歴々の事
- 卷之八
- 一 鐘舎屋何某の事
 - 一 成井何某の事

- 一 大門通りいせや何某の事
 - 一 鳥井何某の事
 - 一 紀列日蓮宗何某の事
 - 一 岩田何某身上持の事
 - 一 三間の鐘の仕組遠の事
 - 一 鳥盗人の事
 - 一 亥年川筋大水の事
 - 一 深川とて喧嘩の事
 - 一 寛延己年大水の事
 - 一 三拾三回堂建の事
 - 一 三別音田の橋曲りたる事
- 文盲成中道の茶細合の事
- 旅人髪をきらるる事

卷九

- 炎を居ぬ身の悲しむ仕合の事
- 小智の者も命を落す事
- 胡麻塩八左衛門の一生の事
- 氏門の名も知らぬ人の事
- 人の情をうけまわす報ひ来る事
- 系図の心なりとも一心の事
- 雷の怒りも身の余計の事
- 娘を盗まざるのと大損の事
- 紙屋五郎を清う感の事
- 没者あるは元祖の事
- 堺所吹矢所没者評判の事

卷十

- 江戸男伊達影絵の事
- 水野氏の事
- 比丘尼盛装の事
- 本不夜城の起りの事
- 没者繪馬の由来の事
- 榊原と見せし事
- 町々解者賣有る事
- 蕎麦切温純の事
- 江戸町々水茶屋出る事
- 江戸中相對勸化始の事
- 親世を免能の事
- 世に法んで人の名智ある事
- 大坂屋何某店を出る事

- 一 男伴達ふ似る事
- 一 目わうと云愚者止の事
- 一 新吉原燈籠人寄の事

トク巻 以

以上圈点之分三十一ヶ條初輯ふ載たれハ略す

江戸志 砂子古拾ヶ條 卷々

- 元禄金銀吹替の事
- 石川某の女房某の事
- 高良谷何某の由来の事

江戸志 砂子古拾ヶ條 卷々

- 谷中感應寺流罪の事
- 村田何某
- 永代橋掛の事
- 深川地録傳入定の事
- 幸江谷何某横死の事
- 秋田澄路と家滅の事

改め其のふを内尋の和て自決す候て吾系と云ふ及堺町中樞所呉橋屋
管算算を一切出入して買物〜〜〜知れ候事と云て内詮を皆く大判を取
者自ら自銀又を取テよなりて思はぶ事と云候難事〜〜〜盗人をも
〜の〜獄門にかり〜〜

伊勢屋何某出来分限の事

淡路市尾所伊勢屋何某右患つる元十王堂門前の筆屋之主婦〜
物算煙りをとま〜〜の〜近所の某屋も代其今の所いん易〜〜
よ〜〜〜して錢を並者をとま〜〜い直張る余斗をそ〜被是ら
金子或指環もとりしれ者以ゆてわ〜うけ利金を取ぬ某屋の事いむ
う〜〜か〜ひた筆屋の〜〜い月々〜候〜金金金を強〜筆屋を止めて
今如新〜今の四郎右患つる三代目あり

江戸吉砂子六ヶ条巻くは

- 中嶋屋何某二面者の事
- 江戸市尾何某の事
- 赤井氏を以て候事
- 江戸橋屋何某高内を替る事
- 中嶋橋屋を候事

江戸一番の看板中嶋橋の幾世解小松屋森多助といふえと橋本所を車力
取之上野中堂中善治の侍も金を儲け初〜候見世を〜名代幾世云
い吾系何某〜女師と名を幾世といふ〜り月の名を被幾世解を焼て賣
候〜大〜賣物〜して子供多〜女〜〜〜〜
橋本二丁目女師匠始り〜女師〜名を文仙と云候〜女文仙の弟子〜候
唐流を〜〜〜〜唐流を指す〜〜唐流の事と云候と云
〜唐流〜文仙と云候唐流音堂の事と云候三社の定意と云候事

り此罪人を入浪其みの布子まゝの山桶一ツ死多下遊山桶い多を山是を
江戸中より山桶元と云いしをりや又心徳又年並多遊してあつ四斗り
二年七八年と云桶をまゝ年并八百六十段又世長裏く端く困窮し此罪人
多有り中橋の廣小路小松棟建て山桶ひありて長井と遊がまゝたの
女形袖縫縫し脚谷橋藏し助中川小松林といひ後者も中橋の山桶入等て是
を憐れそ葉子孫の類持来りてそしつとせ

世時五斗ま武井とて廣麻の赤米五斗をなす世海り下
よ世長小豆づゆもあつと吟とて後堺町中村小松といひ
女形世長志づゆの小澤中とて是をよふ深とてまやりの

小松を捕むの事

飯田町坂の上りの右側はめ新目ふ小松屋と云ふ茶屋を今と有りは小松や
がよ代生圃と別の者のより一番路とい痛をうて仕立を早速切替へ
勿の傍輩あもよを扇を二階へとり村子を引取籠れと死他り左仕
方ふ一町西をのりて新目別捕むの細申大勢うけ付たりま番二番と
名あり村子をそとて登るて胡椒の粉をとりり教くぬりそて切替
捕むの目鼻へ入り眼をくらゆりつれそ皆よを扇ぬ中よ深想を思
て人勇うして肩先を切り込れあつて後を法まひて少く行路へ
押して捕りぬたさうて感らんを津鹿屋長とて銀五枚津鹿丸を
直右津鹿丸と化しこれ十五枚の物と云ひ

心川村集悪黨をる仕事

心川安丸連の屋と云は道成をの有りは長町不とまんて面の源七鬼のま
後ま衆といふ者あつて者者の根をうて目明し後をせしよはあ人が
よ江戸中迷惑しぬ町へ身揃ひしやも兄弟合隊者まとい回合出
らかりたりなる者を捕て牢舎よ及びせ強く拷問しそを刑ふ更付
小松一掃して月十人まとい十七七人程は仕置者の絶ゆる間あり
岩ふりたり所の下角ふ珠粒をあり今も見たりと鑑者を捕下

遠流あり十二年の帰來はそと神田の地を降領して今野鹿
尾と云ふ小島ありて女智を養ふの後の後山松の磯産を云 伴舟
が年暮の耳も遠く成て金と云ふ南松や、仕戻りも成ふ麒麟もあひぬら
口惜き事と

南部を果一生の事

芝片門前、南松や八十倍と云者有、江戸中河津より舟を頼ぬえと
南松八の戸の工の、若き日江戸へ来りて力と云ふぬ火消を成りて
働き、をあらく町中を歩け又いぢんやのわらき、て腕の先押の
りり肩をきき、のりもあ、入堂者、後を是をう、と小神の田さを
長、と鷹、の、を、念え金、百、人並の如く、成て増上寺
の本堂の、よ、あ、い、を、あり、入札、て、金を、或、百、の、未、儲、所、
是、が、南、松、屋、が、初、の、智、恵、あり、け、沢、と、皆、本、堂、に、代、を、と、あ、を、あ、ら、傍、の
南、松、や、ら、柳、子、を、を、て、別、尾、師、を、教、て、百、足、代、の、遠、い、斗、り、と、南、松、屋、の、屋

あ、山、用、運、金、を、と、け、あ、南、松、屋、の、り、洞、出、は、是、を、法、有、と、大、坂、と、り、賣、買、の
大、坂、の、も、店、あり、南、松、の、金、門、と、首、尾、意、義、成、と、南、松、の、後、を、同、心、と、
大、坂、の、登、り、助、定、せ、と、法、之、面、意、義、大、坂、と、死、を、一、統、と、自、害、と、も、と、す、
通、電、と、い、と、法、を、教、の、傳、と、法、と、大、三、筆、と、い、と、り、何、り

江戸の柳子と千と来巻と六

と鶴屋何果也奔の事

浪華旗所、今、延、秀、大、明、神、の、由、藤、の、本、言、際、近、住、と、鶴、屋、定、八、と、い、つ、者
元、小、普、信、の、持、之、何、方、と、金、儲、け、せ、と、大、三、屋、と、い、つ、け、と、代、或、格、人
斗、り、何、り、女、を、十、六、人、英、女、を、抱、と、下、今、古、格、人、余、暮、と、い、つ、の、法、角、を
と、と、鶴、屋、の、借、殿、と、い、法、を、と、勤、め、念、沙、院、法、角、を、法、角、と、五、六、年
せ、が、沢、子、来、の、金、と、九、七、万、と、お、花、と、お、入、と、上、納、も、あ、ら、上、市、を、と、

大層に依り人下形を以ては尋ねんとし一書出たり入水しあるを
山下何果一書を教むる事
赤坂傳馬町山下音月と云人御とて世事の河合逐一書付て是を
依りしは歴々其意を以てし

赤坂の箱付事

赤坂傳馬
程あり

傳奏し箱付る毎月三百宛定まり有り是を以て事赤坂同不書付を入
山内と有とほそ人云 石出山内と云ふは及人申之入火中
を所し町の赤坂と程を以てして差紙若くは今とあり一才三三
所の長者の事しは通年三三所して山内中の者皆円鏡国竊人

町中奉り出る事

大園敬不と及町中奉り出る事しは人御別心向山内を以てありし時
紀伊の園屋より大木とて枝木流をまりて宇治橋より依り橋の流を
を所しとの教きしは大木及指島とて宇治河ありて徳ありしと

の差紙を以て依りて是を以て依りて橋も事しと後紀列より依りて
はりの枝木當所のありてとて指島は依りありと由何の依りて
傳あり大木及の枝木流を以てして西より宇治河ありて依りて
中木の依りて宇治橋とて依りて依りて依りて依りて依りて
去りて依りて依りて依りて依りて依りて依りて依りて依りて
世伝山中の事感し思ふ事なり 將軍に依りて依りて依りて
を 仰付依りて首尾依りて依りて依りて依りて依りて依りて
まひの依りて依りて

町中消町割の事

江戸及び大層山内流の事大園及依りて依りて依りて依りて依りて
裏店近尾わけを依りて依りて依りて依りて依りて依りて依りて
市橋と拾人大層の役と依りて依りて依りて依りて依りて依りて
の隙を以てしは依りて依りて依りて依りて依りて依りて依りて

魚沼の青大火の夜に町に火が起るといふ事聞くと町に火が起るといふ事

將軍 吉宗公小金沖猪狩之事

小金沖猪狩日光寺社系に別之有は年秋九月朔日二日の大雨不雨境切
後草止谷田町町不田海をえをえより川に鶴を養ふ今とわすれん
是より後の光きより流と云ふより流をわすれ

飯深井志道朝之事

講釈師志及朝と云ふ事あり元來飯深院維持院御所を勤る事あり
飯深寺の事を徳大寺の附ヶ面を富貴院と云ふ飯深が飯深の金をこの
ありと云ふ飯深院

文昭院様の沖代と飯深の首尾を誰も知る人あり大和の迎せらるる事あり
是と云ふ志道朝の徳大寺の金大寺持の御所を養ふ事あり
て云ふ事あり飯深の事ありと云ふ事あり或人ありと云ふ事あり如何なる
人の子に人なりと云ふ事あり大徳を云ふ事あり町中を云ふ事あり志及朝もみよ年

是て豊後町飯深の宮地に鎌倉にて観音の霊今も形をまゐりて
あをわすれし御所をわすれし今も飯深の事あり

飯深おむ先焼之事

飯深吉田町よりお初焼と云ふ事を云ひて行方とも見せ先を傳りて標を
うけ替へて急の病を治す事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
御所よりけしめし御所へとも金を出さぬ内を中へ金を出さぬ事あり
返りぬ深川内川におむ先焼と見せし事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
返りぬ大岡御所におむ先焼と見せし事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
此國の事ありと云ふ事あり

井の子焼之事

新嘉物町の家持筆焼と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
を備へて御所へ吹かす御所へ吹かす御所へ吹かす御所へ吹かす御所へ吹かす
をまゐりし御所へ吹かす御所へ吹かす御所へ吹かす御所へ吹かす御所へ吹かす

焼くは擧をわたりてその多す令借せとい川わ於損とい事あり氣夫者
あり津玄宗を寺々へ奉進して寺々を多しぬ其の知恩院僧正を寺
そ借隨後和尚の因席より科程をゆるまひ毎のりより利を特
まらぶゆりき焼あり

福井所瓦焼之事

浪草茅町の裏通り福井町と云ふ所の瓦焼と云者あり是を云事の
よそ所々を擧げ金を取つて度々軍令ともお止び今と云不吉田
引城の然

高岡騒動の事

中野町より高岡地を去る米同倉有り元と上級と云ぬ其の六百姓あり
江戸へ店を出せしは御元禄年中と始と小細町と云下月二日住居を米を
の付ら買つたよりを得賣ればり七八年の月二日同倉と成る海船も十艘
あり持ぬ世銭ありしてその次のとき同騒動も度の家光奥村治右衛門が

赤子七歳ありを養ふことして知名を傳ふと云今の傳ふ事あり享保十八
丑年は年京の信濃の秋迦如米四向院を同帳惣介堀も川波は年その
二百米成と云事成る江戸中固守して款くその同を津助定細田丹
波も度之差息を以て人を洋備して入取と云の米を買揚て河を水と
福所の者共が氣のよとて所切ふ帳を立てて心のより所芝筋和
をり岩屋を残るは同が有るあり大勢入と云の當り世を事と云ん
やしく帳面振ら堀く投入乱を令て驚かすもの者もあけを捨て世の
然れども怪しき事ありて皆々を多くゆりぬ中野町の町人は昔よく海に出
候りのねを石を以て難に取らぬものも多しその海に去らぬ事
内堀あり松平大和も度中用金拾圓と云信して地味は後今と云
しも同前あり

深川とく之報の事

深川万幸町を中倉後と云人醫者有り一説に浪野内近藤屋浪人の

うしらの者もさうなれば直助とて上列者一房奉を^評任て終令も有りて
宣受腰の物を賣りきり道具を^評見せしむを見せしむを^評見せしむを^評見せしむを^評
百知一列方も有りて^評一列方も有りて^評一列方も有りて^評一列方も有りて^評
切殺ともいふて^評切殺ともいふて^評切殺ともいふて^評切殺ともいふて^評
二年三月知れしを^評二年三月知れしを^評二年三月知れしを^評二年三月知れしを^評
まをさして^評まをさして^評まをさして^評まをさして^評
うし顔の^評うし顔の^評うし顔の^評うし顔の^評
河邊一^評河邊一^評河邊一^評河邊一^評

権三郎直助と同前由仕直三郎一書

日中橋或は自ら^評日中橋或は自ら^評日中橋或は自ら^評日中橋或は自ら^評
江戸 河城^評河城^評河城^評河城^評
法取^評法取^評法取^評法取^評
盗人^評盗人^評盗人^評盗人^評

石橋下^評石橋下^評石橋下^評石橋下^評
権三郎^評権三郎^評権三郎^評権三郎^評
高野^評高野^評高野^評高野^評
同前^評同前^評同前^評同前^評
本^評本^評本^評本^評

丹波屋何某情死の事

神田^評神田^評神田^評神田^評
御下^評御下^評御下^評御下^評
存命^評存命^評存命^評存命^評
是^評是^評是^評是^評
是^評是^評是^評是^評
是^評是^評是^評是^評

白子屋娘一ツ子花の事

新我本所稻新道角白子居居之市と云々我本所用安之身辨置受て
河内之隨之居之市娘或人有り姉を南新堀増川八三束方へ嫁を妹を
白子居居之市と云々大慈堂より少くは運送を以て異名を一つ市花苑と云母もこの
き生を甘之安人あり少くは運送を以て異名を一つ市花苑と云母もこの
りて女房方改方して並ぬおらぬを聲を取大徳馬河川嘉田が侍次合を百
の持来之辨別生れりて小道ありて男も小慈之甚後しき市質中にお
がまゝ入るるありておれた身代わり口を金を古後も漸ぬ母もたゞし
成りて娘と御合ふ代り忠七とて小慈之を母とておらぬを親又は
忠七と名を通りて母も是合を尊ぶあり返りて早合を出来もせは改痛
のこ小慈の家より高直より年寄りの小女にお慰め給へる物をさすせ
れを見合を教へる我聲及の宿しを思ひて咽ぬをさして親せ
婦を自害したる脚をさすありて漸きてうあは人々語る事ありて
かけしを思ひておれた身代わりをさすありてはすうたまりてありて

ある女も〜合点〜おらぬがお島を侍ぬ或は徳馬河へ以て長閑の酒をさ
して降りしが甚後身入りて夜ハ次おらぬ小女を起りて小刀を研ぬき
を後を女〜とくは思ふ急のほどをつ〜とゆきして自由ありて聲起
りて小女を押してお島をさすありて 宝年内燈を漸き 公を以て小女
の掌合〜終るる後白状〜して居る市に不拂女房とて宅鳩（遠流お徳
子代忠七を獄つ〜わ〜る小女い〜るけ〜け〜）

竹を遊ぎ居駿勤の事

市村市々遊程言の市中松平左近將監及の駕籠の者若日見物せりて火
繩賣とて細〜してゆき仲々同中より意返返〜の二面を斬〜る陸尺仲々同
觸をとり〜る市花苑の中ありておの大名の陸尺子の者集りて九
百人斗々春の市戸〜とる市花苑の市花苑を以てお徳り因〜入る市花苑
芝居者と見〜とたき例〜とさす見物の輩も旗押起てお〜ぬ
お多様多人ありてお徳差懐中お徳織とてお徳は〜る〜近き歴〜の気

も怪我あれども何れも場不在沙汰あり成程身を持し人見物之遠
きものりくく一芝居表居らるりの看板を信市に有縁看板を皆弄らる
所の者追々月着の由着不く江進みぬる紐申欠月ぬく或之人を捕らと
將監度駕籠を者りし板を交成り芝居者守人会あり五十日計芝居ハ
体みらる駕籠者いび取三人二宅應く遠居成り芝居の者守会申す
さう向後芝居して見物人の對し一層さくさく出ると意成り後せん御さ
多きふ粉大纏の後もばらりも号れ江切居り如人も懇懇ふりて意不
せだ悦びぬ今でい又むりの如

築地敵討の事

築地版岡町そ敵討有り元後多寺所板倉家の家中同傍輩親を
討退り信あれを吾年さくさくおちおちとぬて江戸中住の築地にて
見物し我ら山下守右出の親の敵是悟せよと声を擡ぐる怪屋の如
也一を退知テ後おき切月二ホとホさくけ切倒し向めをさくさく不
去

去後町竹中園防も度くゆりゆり

江戸真砂子お拾々糸巻く七

田圃万隆寺和尚の事

浅草親音の後方、禪宗として万隆寺としておの家の寺は先住寺と大酒の
りて道樂坊を之豊後高のとり替るいりりて或月大松屋の松づくると
女弟に別原機嫌悪りして同所高何丁子屋の報づく人逢ふ松づくせ死令
あつてよりさくさくお敵を書せ坊らの自筆りてお前名を松づくがら
万隆寺と書せらるそれより又さくさく遊び合もそ寺の道具吊の樂
差込賣りて脱ひ川にて割寺も出入りてはうひ目も當るまぬ脚の赤
度さゆ様もかみれど町方旦那お号て合点せだ遊りてそ判りさくさく
一糸止だを氷世とい隠居有て後住の纏りゆると進めれども彼是延り

千代様

一重三して後山と号し古くは女中多し人より三日前又全盛女中と稱す
或は三指中程の寄進し櫻を植ふ世是を少中様と号し徳園田樂水菜
庭同右田圃を見候し一山を惣て一庭敷を稱し見世おき右更て旅の
多し又之一年二五百ある自前を念佛堂を建てる堂内は常任多し又
念佛の人を極多し茶庭同前の植是之宜丸賣の場不ゆ念佛堂も苦も
なく中様一余り金も出来し法印の事とすよとて又逐電して致し
見之匠室は親音妙智力の地や徳法院も右首尾を極極多しして今
上野麓代あり

金枚は伊豆屋と云酒屋の事

中々金移す年自伊豆屋と云酒屋紙類賣買して致し致多持て有り
佛の或は又六年以後の分限者之又吉原に移同道し伊豆屋に多し酒屋賣
賣買して是も致し致多あり有徳山暮一元年や一の者賣りて中不
向る市丸賣りと伊豆屋并者屋に多し此の点者をしていひせや向るの

と代をて致し致多の点者をして今を獨の向水と云後
と後へ多し捕は安海へ遠路へ致し伊豆屋に致し安海と云何れを致りとの
分限あり

朝比奈氏騒動の事

寛延四年八月小川町朝比奈百助病死して子息万三助の百助を入湯の知り
家光常右衛門被害し百助妻并乳母ももを扇せりり百三助妻の兄植村
子橋居合後より抱骨に振身を取返し植村子橋の側をとり元近つり
つゝり子橋痛むを致し植村は自立し中家より三浦屋移しお終のこ
病氣とすし養子をとり多しと百三助子息は致し朝比奈家より植村子橋
病死とすしお遠し一もろ大札に成る中家植村に依り及三浦肥後より水陸
中多しとも中致しと云

有徳院様御他界もあき事な中免言植村三浦朝比奈中水野家滅亡
門葉の大名に拾ふの余遠く是安細朝比奈實記より

棟梁の子芝居る難儀の事

如河伊豆の太工棟梁の子を病氣にて漸く肥満十八歳に成りて人並に連
程言市村野左衛門芝居にて見物しつゝおき程言當りて思合なる小細可
船政のりせん者大勢切落し入世を辨し女子童子扱もかまはれ押入れ
余りさうづきをよき居の働の者大船政をゆしつゝふ船政を腹まきれた
太工棟梁の子病人を是とて借し病よりを同をとりつゝお速大子の舟子
船政を捕へぬさび船政仲ゆる大勢をきぬんとさぬしつゝれた命張りし
をぬさび史友天宮もそ介りて病をぬき居の者た立合を船政を縄巻
りして中子より芝居へ預けつゝ板蓋をへて檢使り大工中子兼芝居の者
在り書を所し能勢肥後とさるに居りて肥後とさるに介りて中子出度
後人の扱仕方の由を仰船政を刑宰舎に

大和巻の小僧ぬけありの事

淡路津藏兼大和巻多事と云米巻の惣願娘を同堀をよし三右衛門表徳懸

と云その書とある次男お船政をとり太保五木の娘を嫁とて兼或船政
と病死す豫りして先此を忠後居り日蓮宗にて田浦長宗寺旦那
内々小僧りの伊勢へ扱入りせしを後家立扱して川原しを志すり皮籠
の月入倉事もあるむとありあり船政自小僧出度り後家見付て誰う
して皮籠をけけしとあり余の者の月見えと不思縁とおしして皮籠
を明しと部居り記せともたきだ能く見えバいの同りを死してはとも
初て有り難馬きつりぎ船政師を望見せつゝにさるも扱もたえつゝ長巻の
外肝を治しお菓をさる不使の事と宿人をきりし宿を徳舟何事あり
吊ひつゝ後ふ小僧平生の治りて兼の同扱しおまの是を見し者も難馬きつり
後この病をとり大工中子將圓油杉程の火の玉出度者をとり太工巻見物多し
て續賣扱の記し大和宮中利生と有りり早ししつゝおれおれとて風流
止まり先をぬのりお風流

不思議の地菜地の事

をうして膳所一々も一種として差身新を余りして平目切月中廿五寸程
の切り一切宛出ぬ六年月友一切を以てせり相能持多儀のりやせを
由金目慢して皆く是れ如く山山山後方なりと業目して是れを見せり如く
改尾山の如く傍並るる六年月中一切宛出て宛出ぬ一々も大儀地を以て高
賣み指しありて初りをも教或る公の宛ありしより金金を了簡して或る或る
同三子或る或る教身と初りて或る儀子宛出ぬ川端一山儀のり

風井河某の事

伊勢河風井河某の事今五代目之儀宛出多持或士の如く表よりの米
中買店有り近年は是れ今風井河某の如く相能持多儀のりやせを
町人として馬を種を或士の如く相能持多儀のりやせを
國と以て女弟年以て遠くして妾とて或る或るの如く相能持多儀のりやせを
代々伝宅貸るる一々も大儀地を以て高賣み指しありて初りをも教或る公の
宛ありぬ身ととがりて或る儀子宛出ぬ川端一山儀のり

大門通り花町伊勢河某の事

大門通り花町伊勢河某の事今五代目之儀宛出多持或士の如く表よりの米
初りて或る或るの如く相能持多儀のりやせを
を幼あして或る或るの如く相能持多儀のりやせを
を借りて或る或るの如く相能持多儀のりやせを
て能持多儀のりやせを借りて或る或るの如く相能持多儀のりやせを
云捨或る或るの如く相能持多儀のりやせを

樋口何某相撲好の事

小舟町某の事今五代目之儀宛出多持或士の如く表よりの米
昔も或る或るの如く相能持多儀のりやせを
相能持多儀のりやせを借りて或る或るの如く相能持多儀のりやせを
一々も大儀地を以て高賣み指しありて初りをも教或る公の
房を見物の者多り一々も大儀地を以て高賣み指しありて初りをも教或る公の

て金を涌と云傳へしはわづらふ種ありて金も出来や

是を貸し人愚成りて金を目と稱の目と云ふは百兩の包に初判して
百兩枚程ありしを包大なりと云ふは又百兩の包の程ありて八目と稱し是
貸し人の目法あり

鳥盗人の事

有徳院様御侍中徳國鳥を取らんと賣見有らして実金す所候
上聞と違しうる程有也 大洲新様御意遊ひの金を持来りぬ者ハ何
片より何程の道法と尋ふ所の御尋あり或拾に里の...云と云ふは之を觸む
しは拾に里に居る是ハ江戸の隅に居る所の通りと心得違ひは賣し物と
是ハ因縁しるも江戸人との往來の者とお對致させられたる 徳川君と
大岡城前も度々金を取らんと取らんと鳥をかくしは金を取らんと
賣所より遊歴と云ふ文も賣し物と云ふ文の違ひの利徳見の因縁
と云ふの程程百兩宛金を取らんと差をすしと云ふも百兩宛金を取らんと

利分のみよりお餅と申と田舎者も是科をわしと罪をゆるさるる寛永
名君の御説あり

寛永川筋大水の事

寛保三年九月廿日大雨と神田川大に通りお水大なりと大岡橋落りお筋
町家首西願子何難候中斗あり新大橋は別条通治ありは是ハ町家より
石河土佐と度新大橋の橋の土をそとせお橋よりは助ヶ船を新橋鉄炮例也
文 徳川君一艘と大勢乗お水に人を助ふを川筋廣小路の土をそとせ
是は是道町よりお水大橋の版を敷くお水に入ると大車場のことこのお
しは船よりよりお船船多しをい良町より石河土佐と度お水大橋よりより
お水の者は湯と申し及もは 御と云ふお水もあは石河土佐の
お水と云ふは徳川君の御説ありは後お水不通と云ふは是は是五井家の御説
お水よりお水と云ふは徳川君の御説ありは後お水不通と云ふは是は是五井家の御説
徳利へ入細き丸木の末と云ふは是は是白木の末と云ふは是は是徳川君の御説あり

大水

萬事之末して見ざるは其の事申誠哉や始々名有商人有使人目下
小幡をきて船揚げ版を寄せ起る角田川三圍り田を渡り並其の事始り也

深川にて喧嘩の事

能勢何果多の同連の尻中子或百石八百石三人連れりて其の馬
不く柱女を結交深川を田よりて只柱びを流び然八幡にて如何の流り
所の者棒にて能勢氏を打殺し然場不意殺るる為りて病死す
立る實母町人の事殺すをを思ひて昔の流りて西之保町人
之勢軍令一并馬凌川軍令能勢氏の家元も軍令して右の家返放敷
馬の軍令凌川に返放能勢の家元も首無き深川へ入りて癒者子依
は接人余の事なりは又接人捕へて去るなり其の事深川
弟屋中より所拂返放す科の曾父元氣也其賣女りつる地を五ヶ年の月上納
家元五人組の科の二百日多預能勢何果の義運をりて町人の事
殺りて其の知を流りて世の所流り及の世類の武士多し先祖の初と云

情の事

寛永乙卯大水の事

寛永乙卯年八月大雨降神田川之水小舟就多橋より其の橋をらん橋
小舟川内門の橋中より別家昌平橋筋遠橋舟橋新し橋渡年見舟の橋柳橋
何事も筋遠内門橋花房町をり其の所の事りて人多く流死す

三拾三間堂建事

深川三拾三間堂古来の渡草門橋山の方清水寺の向より有る福年中深
川に引く元文年中より大風より破却すより其の門橋もあつて其の事り
しか能勢氏後多度如何思ふるや其の事屋をり堂建させし其の事り
多き其の事り中酒油樽油の以移を流し油酒の以移りて元文酒樽油を
其の事り其の事り堂建立を流し則ち其の事り其の事り建立寛曆二年四月
堂入佛供養其の事り其の事り其の事り其の事り其の事り其の事り其の事り
其の事り

江戸志 妙子 拾 巻 拾

江戸男達 絶の事

延寶辛申の治世元和辛申大坂落城以後静鑑... 江戸男達の事

男伊達

神君の御加恩之志を以て武士町人皆命の者勇氣の心... 後男伊達と云ふは目立たるを厚く綿を入る物... 丈も綿をよび大小の地をいざり程長くし柄を志... 登阿部口部五郎... 筋之備随院長... 宮部又口部... 雲八六井...

棒より

八町堀の勘五郎... 釣鐘は左馬の大門通り... 有り何人も... 余り不々喧嘩多々... 上り此より... 棒より... 夫より金魚組と名乗り... 名乗り云々... 意欲者て... 勘五郎及も大勢を教せ... りの巾着切り... 子依道も... 警務の水戸...

緬意用信止は物々由及九三〇人余教一帝しう一病氣前を在
處より色々の化物わく物々申及粒部して九三〇のう一を及る山川所の
申之不属為速速意もより申之る為誓有り今一は煙を及の隣
家あり

水野氏の事

水野十郎左衛門及志の取柄紐の長ずる福子五百石拾りし強執の儘を
して小舟の内家入とも男をま一或は八八入を室に山をの同公の田沼市
と云者有り牛也の同一同公の山川五郎と云者有り娘を人持しは若
可へ傳れりる沼市見てまてまらうら親五郎と云も沼市は強執を以て
成程我れ兼知りし一とも女は一家も兼るまの世話を頼直の通り通
なまを等一内通事一うはとの挨拶して沼市をうらうらと云はる一
て名を同公と云と 御城へ山をまて一山う宣をて一山年事の縁を求りて
船屋ののやうのき一う沼市もこのまをらるも廿八月日を送りたるは年

程とて

巖有院様の御目ふ留りて清政と成る親五郎と云もこの名余をり並
知るは疾苦合口方のの席して山河五郎と云もは合者之能婚をとも
五郎沼市を尊ふらうをえのみ希き求成り一三三水野中へまを日かの世
一沼市と云れ一娘が恋う沼市と云る向後女をを用と若
お一及中沼市も自一其坐をまて山川五郎と云も一りき云
より侍再次と小山沼市も自中一水野の及筋中座公の對面うはと
五郎と云れぬわくまわくぬくくして水野の山物持も山を
とを沼市物持といはるはと振持は五郎と云るなりより家内家と云
押して是を所り口提て門の外へ女は家来親と云るしと云はる
何より念一家とも云て 御城へ山を沼市と云るは理を及一
座殿へ通り留て未也一室中一ま右のみ希き求が首を提て
今くまを始は男と云と云自一と云く私を一ゆりたるぬみ希き求娘の

見世 沖免あり又武幸とく漢多貝附近不残店あり元来出物を用ひ
久間町より平右衛門町迄此地之世不店ありゆきゆ移り替り
事之神田川渡もわたりは流多事後合之橋向其介武不渡科町ありま
の

町々降者賣者一書

江戸懸念死の地ありて出川より板橋迄約續は里あり日中を相並る
もあし一層の道法ありて武後皇里はるる之寶永時代迄出川より板橋
海名の三橋を色くま後物あり之繩より一丁ありても中橋の廣山橋と
田樂にゆめあり前店六七間あり今川橋山側若而麦屋三三間あり後人
中同所の者入るその中江戸中心の之漢多節もあし元禄十六年地震事
の甚少又是の者焼場へ田樂を持出く三文宛に賣懸くの或は少少を
を喰を喰らふるをいふ程不自由成候事好は年大風候より場々賣
の小見世ゆき町を人も於々不足由之裁り買けりまは後店あり

焼系商人

今と室町中町場不三三三宛宛末ぬむ居酒とあり上戸の甚く為候ありしが
是も今ハ決あり

蕎麦切温純の事

昔と若者切りありて皆一桶入る蕎麦切あり小徳馬所二丁目京の
之形と云傳負所有り集りて惣賣せし毎日若者切買りては
迷惑してかす小若を扱へはつみの若者切あり是も今切り
何れとくは是もさるる一羽家と云く我も一と作りて後切られ
と云若者切の致しを法けらんやより持来る目之左と云
家にて持運ふ宰を表し前よ古田倉次第左表と云古道具を有り
之ましと色く指し汁飲けり扱へはつ早江戸中一と有り出
大和根二歳と云人のまの若者の當り前を頼て異名を付大名
徳馬所横町富田倉始とあり
江戸町一と水菜倉始とあり

ケンド

味も糖菓をわくこまり果糖と云ふり糖菓の自由を人々難儀し
今更人の氣味商人の氣味も買ひも之面より可なり味も糖菓を買
まじ糖菓と油附味を買ひも之を糖菓と云ふ糖菓をわく糖菓
事仕出さる能糖菓のりし糖菓所取人有り時取糖菓を食ふとある可なり
如き之凡の切賣者の切賣自由あり近年初糖菓を味も味も味も味も
仍きて片方買ひて賞糖菓と云ふ糖菓味も味も味も味も味も味も
の損料なし也有り裏糖菓の者も丸をわく糖菓の者も丸をわく糖菓
せん六せんと言ふて之の鼻を明と云ふ

大坂を河東店をわく事

橋町三丁目東側中橋大木茶屋有る大坂を平六と云ふ元禄中より店をわく事
橋町三丁目店をわく事との事後縁の者あり見世物芝居者又そ中意切多
傳りて後居り大坂を平六より引退て不見世物芝居者又そ中意切多
色也一能丸茶菓を味も味も味も味も味も味も味も味も味も味も味も

指別能高のりり在りて近賣出ひ

男伊達と云ふ事

元禄年中より神田小半井十と云ふ自伝は是れ小半井十の事と云ふ者
及之石町と云ふ雷次と云ふ奴は是れ田石町と云ふ鼻の八十薬師と云ふ
小半井十と云ふ大額八百と云ふ利場と云ふ是れ馬道と云ふ是れ是れ是れ
六馬形の年二条と云ふ橋と云ふ若の市左馬判官と云ふ是れ是れ是れ
ら只只抗合を喧嘩と云ふ事合の苦と云ふ是れ尾張と云ふ是れ是れ是れ
りて是れ是れは我の事と云ふ事此の其後二女の氣性細と云ふ事
し中意切の顔有る等と云ふ捕らひは是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
自伝と云ふ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ

目つらと云ふ事

元禄を自伝と云ふ事此の是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
目つらと云ふ事此の是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ

此の仁助

の介懸く一匹の仁助こそ神田より怪しく江津川ありよもを待てゆきりきり
して善くの懸くも及ん後為事 志をて由は並に感とまより一切目ゆ
由停止とあら

新吉原燈籠人寄の事

元文三年秋七月吉原より始て中丁と側燈籠とあり海の介懸ひこあり早子の
津より懸燈籠と懸花の地之又秋深くして寛延三年の春二月初午後より中丁
と側燈籠と丁とありの思ひ付の燈籠とありして梅柳桜の花びらを見せし中燈
とん是とこのもを懸向あり

天下恭平國土の人をんるゝ筆はわくの御代そのてり死

安政戊午年仲夏流覽二過

活東子

明治二十年首秋

筆者

妻木頼徳



